

「ら・るな」第3号, 61-66 頁, 1996, るな書房

いじめと不登校の底流

- 学校は行って当たり前か -

門 眞一郎

教師は学校大好き人間か？

学校教師という職業は、基本的には学校は楽しかったという経験を持っている人が選ぶ職業であろう。いじめっ子ではあったかも知れないが、いじめられっ子ではなかったのではないか。しかも教師は、学校という場所で生活してきた期間が、他の職業の人に比べると圧倒的に長い人たちである。ほとんどの教師が、大学まで学校で過ごし、その後の就職先も学校なので、ずっと学校を中心に生活してきていることになる。おそらく学校という所が比較的楽しい場であったからこそ、学校教師を職業に選んだのであろう。

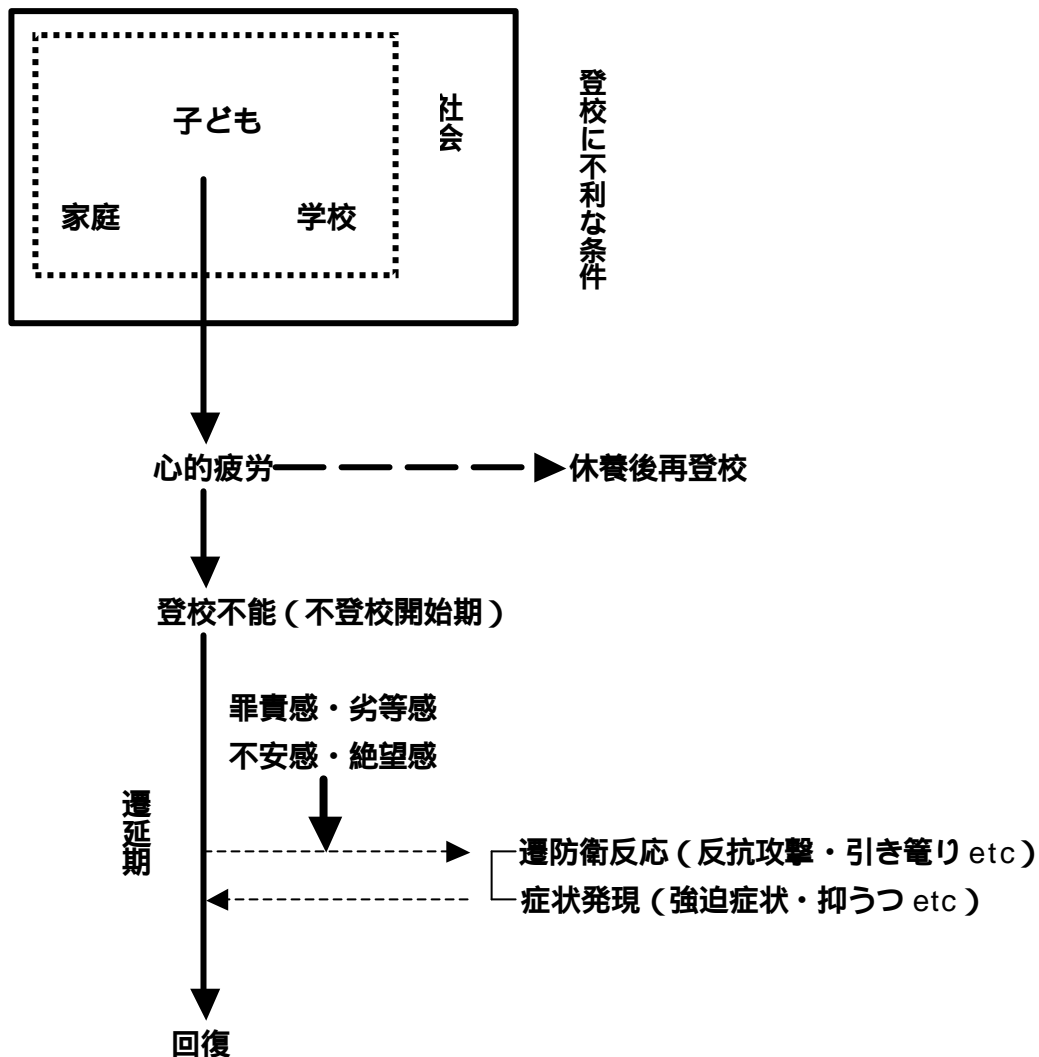
いじめられている子どもや不登校の子どもは、学校教師が感じているような楽しさを学校に対して感じているわけではなからう。だから、学校というところは楽しいところで、毎日元気に通って来るのが当たり前だというような考えは、かれらには通用しない。このことは当然のことだが、案外気づかれていないのではなからうか。

不登校もいじめも社会現象

我々は、何か不可解な出来事に遭遇すると、まずその原因を探そうとする。原因が分かればその対策を立てられるかも知れないし、対策が立てられなくても、とにかく原因が分かっただけでも、不安はかなり解消されるものである。

しかしある出来事の原因を探ろうとするときに我々が犯しやすい間違いは、原因はひとつしかないとの思い込みである。現代の不登校やいじめは、個人的な病理現象ではなく、社会現象であり、社会現象に原因はひとつということはまずありえない。いろんな要因が絡み合って発現する。不登校やいじめの場合も、原因はひとつと考えるべきではなく、いろんなところに目を配る必要がある。

不登校の成り立ち



とりあえず子ども・家庭・学校・地域・社会の5つには目を配る必要がある。不登校の場合、原因という言い方を私はしたくない。要因という言い方も本当はあまりしたくない。不登校に関しては、<不利な条件>を見ていくという考え方をしたい。子どもの側、家庭の側、学校の側、地域の側、社会の側それぞれに、とりあえず学校に行くということに関しては不利となる条件がある。たまたまそれらが絡み合っ、ある日ある子どもが学校に行くときに、非常に大きな不安を覚えて登校できなくなる。それが不登校の始まりである。図の不登校開始期というのはそういう状況のことである。

登校に不利となる条件

登校に不利となる条件は、ひとりひとりの子どもでその数や組合せは異なる。例をひとつ取り上げるなら、学校側の不利な条件のひとつに<いじめ>がある。京都

市児童福祉センターの心療科に不登校で受診した子どものうち、初診の時点ですでにいじめが絡んでいるということが分かっているケースはだいたい6割以上ある。これは初診の時点でのことであるから、この時点ではまだ子どもが打ち明けていない場合も当然ある。昨年末から世間を騒がしているいじめ事件でも、いじめられていることを結局自殺するまで打ち明けていない。子どもはいじめられていてもなかなかそれを親や教師に打ち明けない。打ち明けたところで、前よりもひどい目に合うだけだと予想するからであろう。だから実際には不登校の6割以上にいじめが絡んでいると推測できる。これは相当高い割合である。

疲れるから不登校

もちろん、いじめ以外にも登校に関して不利となる条件はいろいろある。それらが絡み合い、ある日登校するときに非常に大きな不安を覚えて登校できなくなる。そういう状態が不登校の始まりである。この不登校開始期は、頭痛・腹痛・発熱などの身体症状で始まることがよくある。そこで、医者にかかるわけだが、診察の順番が回って来る頃には症状は和らいでいたりする。実際に診察や検査を受けても、身体に特別な異常は発見されず、病気ではないと言われることになる。実はここが非常に重要な分岐点なのである。

「子どもは病気ではない」と言われて、周囲のおとなたちはどうするかというと、「病気ではないのだから明日から学校に行きなさい」と言ってしまうのである。私はこれが大きな間違いだと考えている。周囲のおとなたちは、病気でなかったら健康そのものであるという具合に、人間は病気か健康かどちらか一方でしかないと考えているのである。ところが病気ではないが、かと言って健康そのものとも言いがたいという、いわば両者の中間状態というものがある。それは何かと言うと、「疲れている」状態なのである。

不登校の開始期というのは、子どもが精神的に疲れている状態、疲労困憊している状態であると考えべきである。ここでの考え方を間違うために、その後の対応も当然間違うことになる。たいていのおとなは、この時期に1日も早く学校に戻すことを考えてしまう。そう考えるべきではなく、1日も早く疲れをとることを考えるべきなのである。そのためにはゆっくり休ませることが当然の帰結となる。

ますます疲れる不登校

体が疲れた時には休養が必要だということくらい誰でも考える。実際に休みが取れるかどうかは別にしても、体が疲れているのに無理を重ねると、本当に病気になってしま

うこともある。これは精神的な疲れでも同じことで、無理をして精神的な疲労がどんどんたまっていけば病気になることもある。不登校も同様である。現実には不登校開始期に疲れがとれるような対応をしてもらえとはかぎらない。逆に疲れが溜るような対応をされることも少なくない。それはいろんな形で行われる。

たとえば将来に対する不安を吹き込まれる。「このまま休んでいたら卒業できないゾ！進級さえできないゾ！」、「中学校すら卒業できなかつたら、おまえは一体どうする気だ！中学校も出ていないようなやつは人間のクズだ！」などと言われる。「いまどき高校に行くくらい当り前なのに、中学にすら行けなかつたらどうするのだ」ということなのである。あるいは「会社 休めは学校に行くよりももっとしんどいから、学校に行けないようなやつに、将来会社勤めができるわけがない」という脅しがかけられたりもする。そのほかにも当然学校に行っているべき時間帯なのに行っていない自分を責め、何か悪いことをしているような、罪の意識が芽生えて来る。子どもばかりでなく、親もそういう罪責感を持ってしまう。よその子は学校に行くのに、うちの子だけが行かない。子どもが学校に行かないのは、日本中で自分の家だけだろう、と少なくとも初期のうちは思ってしまう。

休めば当然勉強も遅れるし、不安はどんどん募っていく。不安や葛藤が膨らんでいけば、遷延化し、精神症状が出ることもすらある。あるいは反抗的になったり暴力的になったりすることもある。それは自分を守るためでもある。あるいは抑うつ状態になったり、無気力になったり、閉じ込められたり、何日も風呂に入らないという状態になることもある。

早目に年次休暇で疲れを癒せ

遷延化すると、中には病気あるい病気とまではいかなくても、病気に片足をつっこんだような状態になることもあるから、その場合には治療的な関わりが必要になることもある。しかし初期の状態は病気ではなく、疲れている状態であるから、「治療」は必要ない。むしろ「休養」が必要である。つまり不登校の開始期を疲れだと考えれば、正しい対応の仕方は自ずと見えて来るわけである。疲れているときに無理に学校に行かせれば、子どもはますます疲れるのだから、とにかく休ませる方がよい。しかし、ふつうは親も教師もそうはしないのである。不登校の子どもの数が一向に減らないのは、そのところの考え方が根本的に間違っているからだと思う。疲れているから休養が必要だという考え方をしてくれない。どうしても学校に戻すことの方を考えてしまう。必要なこととは正反対の対応をしているのである。

子ども自身が必要だと思う時に休みが取れるような制度を作ることが、不登校を減らす上で大きな力になるはずである。学校の先生はそういう権利（年次有給休暇）を持っているのに、生徒には持たせないというのはちょっと身勝手なのではないか。子どもは

疲れを知らない生き物であるとしても考えているのであろうか。子どもだって当然疲れるときには疲れるはずである。だから子どもも疲れたときに休みが取れるというのは非常に大事な権利だと思う。

年間何日休めるようにするかはともかくとして、年次休暇というのは自由に取れて、休むときに理由を言う必要がないという点が重要なのである。疲れをとるためには、病気や葬儀といった理由を持ち出さなくても休みを取れるという点が大事である。実際には、仮病という形で、つまり風邪や微熱を理由に学校を休んでいる子どもがずいぶんいるということが分かっている。それでもしないよりはましである。しかし、しかるべき理由がないと休めないのでは、自由に外にも出られない。風邪で休んでいることになっているから、うっかり外に出て見つけたら何を言われるか分からないということになる。理由を言わなくても休めるということは非常に重要なことなのである。こういう年次休暇制度を作れば、おそらくどう少なく見積っても、現在の不登校の半分は消えると思う。もっと減るだろうと私は内心では期待している。

第2土曜日、第4土曜日と休みを増やしていても、現実にはますますゆとりがなくなっていく。ゆとりをもたせるための制度のはずが、授業時間が減るためにカリキュラムが圧縮され、かえってゆとりがなくなるという弊害が出て来ているようである。第2土曜日にしろ、第4土曜日にしろ、休みたくない者も休まされる。休みたい人はよいが、休みたくない人も休まなくてはいけない。一方で休みたくても、決まった日以外には休めない。これは非常に不合理なことである。土曜日の休みを増やす必要などない。年次休暇で渡してしまえばよいのである。

差違の摘発に始まるいじめ

いじめは今の学校からは到底なくならないうと思う。言い替えれば、いじめをなくそうなどということはどだい無理だろうと思う。なぜかと言うと、いじめ実行のトレーニングを学校は日々子どもに積ませているとしか考えられないからである。

いじめというのは簡単に言うと、ある子どもが他の子どもに自分(たち)とは違うところを見つけて、その差違にレッテルを貼り、その子を排除する、あるいは危害を加える、あるいは搾取するということである。その差違を見つかるトレーニングを学校は積ませすぎている。これは小学校に入学した直後から(あるいはそれ以前からのこともあろう)ずっと行われていることである。差違を見つけてはそれを切り捨てる。そういうトレーニングを子どもは毎日毎日やられている。正解というものは1つしかなく、その正解と少しでも違くと、それは間違いであるとして捨てさせられる。そういう練習を毎日積んで来ている。当然、差違に非常に敏感になる。違いの分かる男と違いの分かる女の大量生産が日々行われているのである。

典型的な例は、漢字の書き順である。漢字には正しい書き順というのが一つだけあっ

て、その書き順が少しでも違っているとそれは間違いだと烙印を押される。社会に出れば、学校では間違いとされた書き順で漢字を書いても、誰も問題にはしない。なのになぜか小学校では、唯一正しい書き順で書くことをたたき込まれるのである。

漢字に関してもうひとつ例を挙げると、これは私の子どもが小学校3年生の時だったと思うが、たまたま漢字テストの解答用紙がテーブルの上に置いてあった。問題のひとつは、「きく」の漢字を問うものであった。解答欄には門がまえの中に耳が書かれていて、それには赤ペンでXがついていた。私はしばし見つめて、「あ、これは正しい字に書き直してあるのだな」と思った。しかしそれは書き直された字ではなかった。その字が間違いだったのである。私も日頃これと同じ字を書いているので、正解が分からず、わが子に聞いてみると、門がまえの中は「耳」ではないと言うのである。さっそく辞書を引いてみると、確かに子どもの言うとおりであった。聞くのは耳で聞くのだから、門がまえの中はてっきり耳だと思い込んでいて、私は今までずっとそのように書いてきた。

他にも漢字に関しては、どこをはねないといけないとか、どこをはねてはいけないとか、そのようなことも含めて、正解との違いを意識させることが非常に多い。

「学問のすゝめ」を読む

差違の摘発のことでもうひとつ思い出すことがある。これは私自身の高校時代のことである。日本史のテストで、福沢諭吉の代表的な著作を書けという問題が出た。私は、「学問のすすめ」と書いたのだが、減点されたのである。正解は、「学問のすゝめ」なのだそう。岩波文庫を手にとってみると確かに「学問のすゝめ」となっている。しかし最初出版されたときは、カタカナ書きで「学問ノスゝメ」となっていたのではなからうか。初版から平仮名であったとしても、漢字は旧漢字であったはずだから、うるさく言うのなら「學問のすゝめ」を正解とすべきではないか、と今でも思い出すと不愉快になる。

そんなことばかりうるさく言われるから、肝心の中身に対する興味は失われて、「学問のすゝめ」を当時は全然読む気にはならなかった。初めて読んだのは32歳の時である。曰く因縁のある「学問のすゝめ」を、高校を出て14年経って初めて読んでみると、面白いことに気がついた。

この本の冒頭の一文はあまりにも有名である。私は、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」だとばかり思い込んでいた。しかしこの有名な書き出しの一文は、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」で終わっていない。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」で終わっている。つまり、『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』と言われている、ということなのである。つまり『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』ということ自体は、福沢諭吉のオリジナルな思想ではない。これはアメリカ独立宣言やフランス人権宣言の思想を要約した表現なのであ

る。

実は「と言えり」がくせ者なのである。この言葉は、当然この文の次に福沢諭吉の言いたいことが続くことを示唆するものである。この後にどういうことが書かれているか。すなわち、『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』と言われているけれども、現実の世の中を見渡したら、身分の上下や貧富の差には雲泥の差がある。その差はどこから来ているかと言うと、学ぶか学ばないかの違いである。そこで福沢先生は「勉強しなさい」とのたまうわけである。これでは「学問による差別再生産のすゝめ」でしかない。

「学問のすゝめ」は 123 年前の 1872 年に初版が出版されたのだが、当時爆発的なベストセラーとなり、わが国の学校教育の普及に大いに貢献したと思われる。これは今でもわが国の学校教育の大きな原動力になっているのではないかと思う。とにかく学校へ行くことが「学問のすゝめ」の中では至上命令になっており、学校で教育を受けることが日本人の道德感の基礎となっていく上で大きな役割を果たしたと言える。

習慣となった差違の摘発

実は差違を意識することは、それ自体悪いことではない。ポーヴォワールは、「第二の性」の中で次のように言っている。「主体は対立することによって自己を立てる。自己を本質的とし、他者を非本質的なもの、客体とみなすことによっておのれを確立して行こうとするものだ」と。エリクソンの言うように思春期青年期の発達課題を自己同一性の確立を目指すことと考えれば、他者との対立、自他の差違の意識化の中で自己同一性を確立していくと言えよう。

そういう意味では、差違を意識するトレーニング自体は決して悪いことではない。しかし、今の学校教育は、あまりに差異の意識化と負のラベル付与に偏って精力を注ぎすぎているのではないか。違いに見えていたことも見方を変えれば同じものに見えろとか、物事にはいろんな見方があるというようなことをあまり教わらず、ひたすら差違を見つけ、少しでも正解と違うものは捨てる。そういう差違の摘発練習を子どもたちに積み重ねすぎている。そのために子どもは、人と人との違いに対して負のイメージを抱き、それを排除することがごくごく自然にできるようになってしまう。これでは到底いじめはなくなるならない。

おわりに

不登校やいじめに対して根本的な解決を目指すためには、明治以来の学校教育の形式と内容を根底から検討しなおし、とくに古くから前提となっている学校教育の「常識」

を考えなおす必要がある。その例としてとりあえずここでは、「学校は行って当たり前」と「違いは切り捨てる」の2つの学校常識を取り上げた。